

科目区分： 専門教育科目 音楽教育・音楽文化
授業科目名： 器楽アンサンブル（2）（4）（6）（8）
対象年次： 1～4

「器楽アンサンブル」に関する授業評価

音楽教育講座：市川 克明

1. 授業の基本情報・概要

本授業は、教育学部芸術文化過程・学校教育教員養成課程の音楽専攻者を中心に、教育学部の他学科専修、および他学科学生による管打楽器合奏授業である。指導・指揮は担当者のみで行い受講生は41名である。

後期開講の器楽アンサンブル（2）、（4）、（6）、（8）では、12月に開催された教育学部で音楽を専門とする学生による「楽友会コンサート」に向け練習を重ねた。今回は、全日本吹奏楽コンクール課題曲2曲（1982年度、2015年度）と同コンクールで自由曲で取り上げられることの多い2曲（A. ボロディン作曲 歌劇イーゴリ公よりポーロヴェツ（ダッタン）人の踊り、R. ヴァーグナー作曲 歌劇ローエングリンより「エルザの大聖堂への行列」ほか）を演奏した。

また、この演奏会后1月から2月は5名から14名の小編成による合奏アンサンブルを取り上げ、10のグループに分け練習した。15回目の最後の授業では、その成果を発表しあう学生の企画運営での授業内発表会を行った。



授業内での合奏練習

2. 授業評価・授業研究の内容

12月の「楽友会コンサート」では上記の演奏曲目で30分程度演奏したが、これは、非常に野心的なプログラミングで、学生たちの能力の最大限を要求する難曲であった。しかし、学生たちは、日々の個人練習、自主的なパート練習（課外での活動、アクティブラーニング）を行い、週1回の授業に備え克服した。その結果、内外から高い評価を得た素晴らしい演奏を披露することができた。

演奏会に向けての練習期間、すなわち10月から12月は、個人練習に加え、学生たち自身が自主的に呼びかけ時間外でグループ練習を実施、また経験者は他のグループあるいはメンバーの指導も行った。

DPのアンケートや授業内アンケートを実施したが、すべての学生が「合奏、アンサンブルする喜び」を感じ、また短い時間、少ない練習回数（1週1回1時間30分）にもかかわらず質の高い音楽活動ができたことを感じていた。通常、吹奏楽練習は中高等学校では部活動として毎日行われており、これらを経験した学生にとっては練習回数の点で物足りないと感じた者もいたが、反面、授業内あるいは自主練習活動では指導的な役割を担い、他の受講生を牽引していく、という自覚のもと充実した授業であったと答えている。今回は、前述の通りかなりの難曲に取り組み、そのせいか、経験者の満足度



指揮：市川克明, 2015年12月20日楽友会コンサート（松山市コミュニティーセンター）

は非常に高かった。選曲も受講生にアンケートを実施し学生たちの提案で決定した楽曲が3曲あり、その点においても学生たち自身が積極的に参加・関与する授業が実施できたと感じている。大きな演奏会で大勢の観客で演奏すること、授業内の発表を目標にして自主的に練習し学生たちだけで音楽作りを行うこと、これは学生への自信につながり、かつまた学生たち自身のアンケートによる高い満足度につながったと思われる。

3. 「授業時間外学習の促進」について

授業の性格上、基本的に授業外学習（練習）は必須である。学生は自らがその役割を認識し、自主的に個人練習を行って

いた。さらに、各パート（5名～10名程度の小グループ）で毎週定期的に自主的な練習も行っていた。

自主的な練習ではあるが、より効果的なものとするため、授業内で課題を与え、特に初心者に対するきめ細かな指導法を伝授した。適切な教則本、練習曲などは随時提示し、適宜質問を受け付け授業担当者と参加学生のコミュニケーションを密に行い、授業外活動における円滑な運営を行わせることができた。

特に参加学生に目的を持って練習させることに主眼を置き、細かな練習内容の指示は学生授業代表者、各パートリーダーを通じ頻繁に行った。

その結果、学生の自主的な練習活動に加え、効果的な指導が行われ、初心者学生を多く含むにもかかわらず、非常にレベルの高い演奏を行うことができ、経験者



指揮：市川克明



フルート・オーボエパート



クラリネットパート

自主的なグループ練習

学生にとっては授業内、授業外学習（練習）において「指導する」ということを体験することができた。



個人指導



サクソフォーンパート

自主的なグループ練習

4. 総括

各学期で1時間30分の授業が15回、うち初回をガイダンスに、最終授業を授業内発表に充てると実質的には13回の練習回数となるが、これは「もっと多く合奏をしたい」という授業アンケートからも読み取れるように、少ないと思われる。授業回数が決まっている以上、この中でより効果的な練習活動を行う必要があるが、このためには授業時間外活動が非常に重要となる。

各パートの練習は学生の自主活動により比較的毎週行われているが、そのための個人的な練習は必ずしもすべての学生に定着しているわけではない。基本的な演奏法、各楽曲の個人的な問題の克服は授業時間外に行うことが重要である。楽器の演奏はとにかく毎日行うことが上達への近道で、様々な事柄に忙殺される学生

に毎日短時間でも楽器にさわって練習する、という「癖」をつけさせることが肝要かと思われる。

また、特に教員を志す学生にとってこの器楽アンサンブル（吹奏楽）の授業は、たとえば部活動の指導において直接的に役立つ科目と言える。さらに、他専攻や他学部学生の吹奏楽経験者の高い演奏能力を目標にできるため、練習の方法、マネジメントの方法など指導者としての役割を学ぶことができるため、吹奏楽を通じ、教育活動での幅広い指導的能力を身につけることができる当該授業は、音楽専門科目として、今後ますます重要になると考える。来年度は松山大学、東雲大学との単位互換制度を導入し、他大学生との授業内での交流も期待でき、これは愛媛大学の学生にとっても貴重な機会になるとと思われる。

さらに主として3回生が受講する教員免許状取得のための必修科目である「指揮法」とリンクさせ、実際に吹奏楽を指揮・指導する、という内容の授業も行い、理論と実践に役立てる場を提供した。

このように、教育学部で音楽を専門とする学生ができるだけ多くこの授業を選択したいという魅力ある授業、あるいは即戦力として役立つ授業を行い、さらに「音楽の専門家」として、教育者としての心構えを身につけさせることを次の目標にしていきたい。



指揮法受講生のための指揮レッスン